



を調整（変革）していく。それぞれのコミュニティには、望ましい行為や基準、価値観、求められる知識やスキルがあり、また、そこでのルールや習慣、システム、関係性も異なる。大学の中で有能に振る舞うことができても、「コミュニティが違えば、大学でやってきたような高いパフォーマンスを発揮できないことも起こる。理論と実践には常にこのようなズレがあり、水平的

明治大学の教育

学生の主体的な活動を 生み出す大学の学習環境

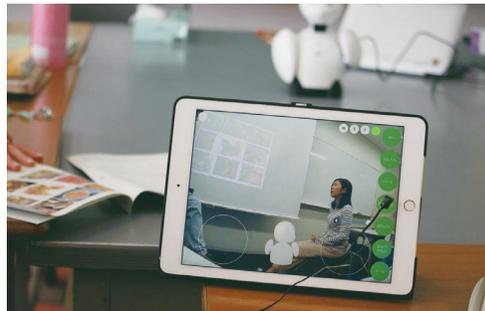
高等教育における水平的学習

高等教育の教育環境が外に開かれ、理論と実践をつなぐ教育実践が展開されるようになった。学生は、大学で学んだことを実際の現場で活用し、また、現場で経験したことを学問の理解につなげ、それを相互に行き来しながら理論への理解を深め、実践知を身につけることができるようになった。国際日本学部では、地域と連携したさまざまな実践が正課、正課外のどちらでも幅広く実践されている。

伝統的な教室での学習では、学生は今まで知らなかったことを教員に教えてもらい

学習においてはこのズレが新しい学習活動のはじまりとなる。水平的学習において、学生たちはやり方がわからないこと、経験したことがないことに直面するが、さまざまな知識、経験、スキルを持つ人々とアイデアを出しながらその道筋を見つけて、彼らの知識や経験を結びつけながら新しい知を創造していく。

ここで紹介するのは、国際日本学部の学生の水平的学習の一事例である。国際日本学部の授業「国際日本学実践科目C」において、受講生は、教育工学を専門とする岸のもと、新しいテクノロジーを活用した新しい活動の創出に取り組んだ。授業では、教員が仕組んだ教育環境の中で、分身型ロボット OriHime（以下、OriHime）を活用した実践を行い、その理論と方法論について学んだ。OriHime はロボットの上半身（首と腕）をユーザーが遠隔で操作できるロボットである。そこで学んだことをもとに、



授業終了後、任意の学生が OriHime を活用して、実際に大阪府の特別支援学校（2年間）やトルコに避難するシリア難民の教育支援をはじめた。身体的、政治的理由などのために社会的に孤立した生徒たちが、社会のさまざまな活動に参加できることを支援することを目指したプロジェクトを学生たちが主体となって創り出した。上述したように、コンテキストが違えば、見方、考え方、やり方が通じないことがある中で、彼らがどのように水平的学習をしていたかについて紹介する。

ながら基礎を学び、次第に高度で複雑な問題を解けるようになっていく学び方をすすめる。このように、下から上へ階段を上がっていくように段階的にできるようにしていく学習観を「垂直的学習」と呼ぶ。一方で、学生が大学という教育環境を超えて（越境して）、実践や現場に身を置き、大学で習得した知識や方法を新しい実践や現場に合わせて再構築していくような学びを「水平的学習」という。学生は、大学で学んだことを別の場面で実践し、うまくいかないことがあれば、なぜうまくいかないのか、どうすればうまくいくのか、ということを考え、今までの見方、考え方、やり方

Education of
Meiji
University

PROFILE



岸 磨貴子 Makiko Kishi

国際日本学部 特任准教授

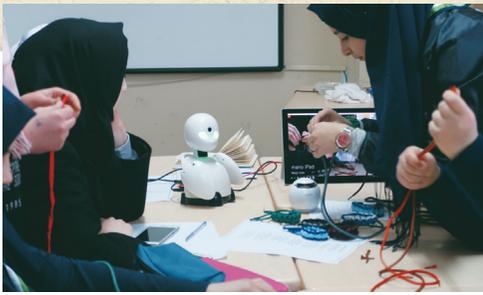
専門：教育工学
1977年 大阪生まれ
2010年 関西大学大学院 総合情報学研究所 博士（情報学）修了

2010年 京都外国語大学研究員
2013年 明治大学特任講師
2016年 明治大学特任准教授

主な著書・論文：『大学教育をデザインする－構成主義に基づいた教育実践－』（共著・見洋書房・2012年）
『異文化間教育のフロンティア』（共著・明石書房・2016年）

所属学会：日本教育工学会、日本教育メディア学会、異文化間教育学会、多文化関係学会、質的心理学会、国際開発学会など

大学在学中、アフリカから中米まで少数民族や僻地に住む人びとの生活のフィールドワークを行う。2012年から2年間、国際ボランティアとしてシリア・アラブ共和国の国連機関（国連パレスチナ難民救済事業機関：UNRWA）にてパレスチナ難民の教育支援に携わる。帰国後もシリアで内戦がはじまる2011年までUNRWAと教育開発プロジェクトに従事。他にも、ミャンマー、エジプト、インド、中国の教育支援に関わっている。国内では、インターネットを活用し、日本と世界をつなぎ協働を通じた学習（国際交流学習）を初等・中等・高等教育にて共同実施。文部科学省委託のICT活用教育アドバイザー、パナソニック教育財団専門員、JICA短期専門家としても従事。



シリア人生徒がブレッドボードの作り方を教えている様子

い。想定外の出来事には柔軟に立ち向かい、誰かの真似をするのではなく、前向きさを忘れずに目標に向かうワクワク感を、学生同士だけではなく連携している先生とも共有しながら取り組んだ。失敗から学び、成功から学び、他人から学び、自己を振り返ることからも学んだ、枠組のない自由な実践の上には、今までよりも少し大きくなった自分たちの姿がある。

OriHimeを活用した学生主体のプロジェクト概要

久保 慎祐野 (国際日本学部4年生)



OriHimeを活用した教育実践として、限られた人となしに接する機会の少ない肢体不自由の方が社会での活動に「お出かけ」することを、大学生という立場からどのように関わられるかを模索した。実際に、重度障がいを持った右手在住の方にOriHimeを通して授業内でお話を伺うなど、議論を

重ね具体的な方法を提案した。その取り組みの一つとして、大阪の特別支援学校の生徒に明治大学へ「お出かけ」してもらい、キャンパスツアーを通して大学生活を感じてもらおうという活動を実施したが、遠隔地にいる生徒との接し方などさまざまな課題が残ったまま春学期が終了した。

その後も支援学校の生徒たちと英語の授業での交流を続けた。国際日本学部にも所属する自分たちからは海外生活の紹介を、生徒たちからは地元大阪の紹介をそれぞれ英語で行い、インタラクティブな授業にする工夫を試みた。課題もたくさん

残った1年目であったが、生徒が興味を持ち積極的に英語で話そうとしてくれたことや、将来への新しい展望を持ってくれたことが何よりうれしかった。

2年目は国際理解をテーマに、OriHimeを活用したコミュニケーションにも焦点を当て、留学生との対話を通じた異文化学習ができる環境作りを行った。「次は上手くできるか」という緊張感を常に持ち、トライアンドエラーのサイクルを繰り返しながら方法論を見出していった。これらの活動を通して、OriHime

Students' Voice

緒方 日菜子

国際日本学部4年生



会話のスタイルの異なる相手との関わりを通して、コミュニケーションの本質に興味がありました。この実践では、特別支援学校の生徒と一緒に、人に何かを伝えるときの「伝え方」をさまざまな方向から考え工夫することで、快適なコミュニケーションを実現するための気付きを得ました。

佐藤 瑛子

国際日本学部4年生



支援学校の生徒の当たり前と学生の当たり前には違いがあり、それが新鮮さ、面白さであると同時に、実践を行う上での壁でもありました。ロボットの特性を活かして、お互いの理解を深めながら、「ロボットだからできるコミュニケーション」を生徒、先生、学生とで見つけていきました。

徐 アヨン

国際日本学部 韓国留学生 1年生



OriHimeを使うことで、人との関わり方への考え方が変わりました。以前はコミュニケーションとは人と人が対面で話すことだと考えていましたが、相手、状況、使用するツールによって、さまざまな形で人と関わり、関係を築くことができると考えるようになりました。

大阪府の特別支援学校の教員から

植田 詩織



明治大学の学生と本校の生徒がインターネットでつながり、言葉だけではなくOriHimeを活用することでコミュニケーションの幅を広げて交流できた。本校の生徒にとって、明治大学の学生との学習は、知識を得ることだけではなく、コミュニケーションについて考える機会となった。彼らが普段

さらなる実践の発展…国際協力としてのシリア難民の教育支援

OriHimeを活用した学生たちによる実践は、国内だけではなく海外へと広がっている。国際日本学部では、グローバルイシューへの関心が高く、本実践は、国際協力の実践へと広がった。彼らは、トルコに避難したシリア難民の生徒が社会的に孤立していることを知り、OriHimeを活用した授業支援および文化交流を実施した。具体的には、大阪府の支援学校との実践経験を活かして、トルコのシリア

接する人たちは、主に家族や医者、学校教員と限られがちである。そのため、学生たちとの交流は本校の生徒にとって大きな驚きであり、新しい挑戦であった。特別支援学校の様子は、外部の人にはあまり知られていない。学生たちは、生徒のニーズや状況を知るため、常に事前の打ち合わせを行い、生徒が安心して学べる学習環境を創りだしてくれた。この交流を通して、「今度は私が明治大のみんなに何か教えたい」と生徒の自発性も見られるようになった。

人学校の英語の授業に参加して英会話演習をしたり、シリア難民の生徒と日本人生徒の文化交流を支援したりした。

大学の教育環境を開くことで、学生は無限に開かれた学習を展開することができ。このような学生の水平的学習を支援するためには、大学の学習環境が重要である。それは、学生たちの活動を支援するICT機器などツールや多様なリソース、異種混交な人的ネットワーク、そして空間であり、明治大学のこの環境を最大限に活用して学生たちには多くを学んでもらいたい。

1年目 春学期

活動内容

国際日本学実践科目
キャンパスツアーの企画・実施
OriHimeを使用し、生徒と先生がキャンパスツアー等を通して英語で交流し、関係の構築を目指した。

活動目的

1年目 秋学期

正課外

居住・滞在地域の紹介
OriHimeを通して学生と英語で相互の地元の紹介をすることで、英語学習への意識向上を目指した。

2年目 春学期

正課外

留学生との異文化交流
生徒の異文化理解をテーマにおき、OriHimeを使用したコミュニケーション方法の探求に取り組んだ。